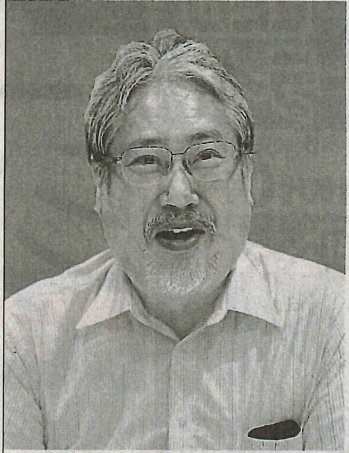


静岡新聞社 第29回「読者と報道委員会」

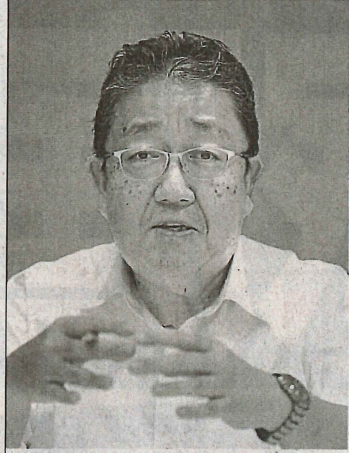
静岡新聞社の「読者と報道委員会」は9日、静岡市駿河区で第29回会合を開いた。議題は「サクラエビ異変」と「統一地方選と参院選を巡る報道」。フォトンバレーセンター長の伊東幸宏委員、聖隷福祉事業団理事常務執行役員の鎌田裕子委員、弁護士近藤浩志委員の3氏が本社側と意見交換した。(進行は萩田雅宏編集局長)



鎌田 裕子 委員
かまた・ゆうこ 聖隷浜松病院などで看護師として勤務後、聖隷福祉事業団で人材開発部長などを歴任。2017年1月から同事業団常務執行役員。19年6月から理事。浜松医大大学院修士課程修了。掛川市出身、浜松市在住。



伊東 幸宏 委員
いとう・ゆきひろ 1990年静岡大工学部助教授、同大情報学部教授、情報学部長を経て2010年から16年度末まで同大学長。17年度からフォトンバレーセンター長。県教育委員。早大大学院修了。工学博士。東京都出身、浜松市在住。



近藤 浩志 委員
こんどう・ひろし 1996年弁護士登録。2017年静岡県弁護士会会長。日本司法支援センター法テラス沼津支部長、沼津人権擁護委員協議会会長。明治大法学部卒。東伊豆町出身、沼津市在住。

統一地方選と参院選を巡る報道

記者の顔写真と感想を入れたルポルタージュで選挙の争点や課題を浮かび上がらせる企画や、本社の「静岡美人時計」に登録するモデルが記者となり若者の投票率アップを推す特集など、従来の新しい選挙報道を試みました。

鎌田委員 各市長選の構図を告示前に掲載してくれたことで、頭の整理ができた。選挙期間中に候補者の顔写真や公約を一覧で載せたのも比較しやすいかった。県民が考える争点を掲載した私の争点や、記者の顔写真が紙面に登場したのは新鮮だった。選挙はゴールではなく、当選者は何をしてくれるのかという思いがある。連載「課題を問う」ではそのための新たなスタート地点を示した。

伊東委員 静岡、浜松両市長選の横顔や公約、参院選の候補者アンケートは見やすく、整理されていた。候補者を選ぶ参考になった。漫画の活用や静岡美人時計とのコラボなど工夫もよく分かった。そう思うと同時に、なぜ投票率がこれほど上がらないのかとも思う。香港や韓国の若者は政治に対して行動を起こすのに、日本はこれだけいいのかと思う。選挙の時だけでなく、投票率アップに向けた報道を継続してほしい。新聞が果たす役割は大きい。

近藤委員 選挙報道に期待することは二つある。一つは候補者の人物像や主張を正しく伝えること。もう一つは、その主張に問題点がないか、分かりやすく批評すること。人物像や主張に関する報道は両政令市長選と参院選は素晴らしいと感じた。一方、沼津市議選は投票率41%台。立候補者やその人となりがよく分からないのが一因だと思う。新聞で市議選や県議選レベルでも人物像や主張を伝える努力をしてほしい。選挙期間中、批評した記事はあまりなかった。公正な報道を意識する必要があるのだから、

サクラエビ異変

国内では駿河湾のみで水揚げされているサクラエビ。昨春から記録的不漁で、秋は事実上漁を行わない異例の措置となりました。年明けから不漁の原因究明とともに、地域に根付いた歴史や文化を含めて俯瞰(ふかん)的に取り上げています。環境問題も考えていかねばと考えています。

鎌田委員 「サクラエビ異変」というフレーズが最初に飛び込んできた時、個人的には県中部の話かなと。「かき揚げがおいしい」というイメージしかなかった。私も含めて県西部の人たちにとつては関心の低いテーマかな。ただ、記事を読んでいくうちに不法投棄や環境の変化などが出てきて、これは大問題だと気付かされた。グラフや動画を多用して、非常に分かりやすい。一方で、動画は操作に慣れている若い人たちは大丈夫と思うが、年齢層の高い読者にはどうなのか。動画はリアルに状況を把握できるというメリットがあり、幅広い層に使ってもらえるかが課題だ。

伊東委員 不漁の背景として、取り過ぎや海水温の変化に始まり、海と川、そして山の環境問題、さらには人為的な不法投棄と、ドラマのような展開。「濁っている河川の環境を改善し、清流を取り戻す」など取材班が報道の具体的な成果を目標に描きながら取り組んでいることは大事だ。シンポジウムを開いたり、ホームページでこれまでの記事やコンパクトな形で一読できるようにしたりすることを検討してほしい。読者に再度、問題意識を持ってもらえと思う。

近藤委員 毎回記事を楽しみに読んでいます。だんだん大きな話になっているのが興味深い。うまく駆使している動画だが、内容にシヨックを受けた。ダムに砂などが堆積し、ほぼ完全に埋まっていた。非常に分かりやすかった。先ほどから言われている目標を持つているのも評価できる。

投票率の向上へ役割大

期間中も批評積極的に

当選後の活動も伝えて

が、事実に基づく批評は全く問題ない。積極的にやってほしい。

選挙によっては候補者の政策を噛み砕くことや、その実現可能性を検証して伝えることが十分でないというのでは、という思いもあります。率直な意見をお願いします。

伊東委員 候補者やその政策をどう評価しているかについては、確かに物足りない。日本のマスコミは中立であり、

取材班の目標設定共感 地元を寄り添い継続を 世界で起きている問題

近藤委員 実際のデータを基に、サクラエビの水揚げ量と富士川から駿河湾に流れ出る窒素量の関係を指摘した田中博通東海大名誉教授の記事(1月5日付朝刊1面)は分かりやすかった。いろいろな視点から伝えることが欠かせない。

鎌田委員 地元を寄り添うのは地方紙の使命。揺るがずに継続してほしい。

近藤委員 漁師の取り過ぎとの指摘だが、プル制というルールがあり漁師同士は信頼しあっていた。きちんとしてきた部分や、漁師が身を切る努力をしてきたことを紹介した上で、今後のあり方について新聞が提案していく姿勢が大切だと思う。

伊東委員 富士川のアユ減少に関する調査報告書を取り上げた記事(6月24日付朝刊1面)にあったが、QRコードから報告書全文が閲覧できる仕組みは良い。読者自身が検証する際に必要な情報だ。サクラエビの不漁と同様の問題は世界中で起きている。地球規模の問題として各地の実情も紹介してくれたらありがたい。

主権することを禁止しているの、今後その法の改正についてでも新聞で議論してもらいたい。工夫したさまざまな取り組みはそのまま続けてほしい。すぐ効果が出るような話ではない。投票率向上に向けた新聞の役割を果たしてほしい。

鎌田委員 当選した人のその後を継続して書いてほしい。それによって次の選挙に興味やわく。一回一回ぶつ切りの選挙ではない。さまざまな業界でもPDCA(計画、実行、検証、改善)を回すことが重視されている。選ばれた人がどんな成果を出したのか、また落選した人は、どのようなことをやって次の選挙に向かったか、継続的に書いてほしい。

伊東委員 あつてしかるべき。選挙が終わって聞かされるとき、だまされた気持ちになる。選挙期間中に伝え、判断材料の一つにすべきこと。裏が取れている真実は隠さず報道してもらいたい。

近藤委員 同感だ。興味を持ってずっと読んだ。事実が裏付けられていれば、どんなやつてほしい。

■統一地方選と参院選を巡る報道 2019年は12年に1度、統一地方選と参院選が行われる「選挙の年」。編集局に部横断のプロジェクトチームを編成し、取材報道に当たった。統一選では、地域の課題を掘り下げて有権者の1票の選択に資する情報の提供に努めた。参院選は読者の関心を高めるため漫画を活用し、候補者アンケートの結果は記事の仕立てや紙面レイアウトを工夫した。候補者の主張を整理して報じ、新たな企画や手法を積極的に取り入れた点に、委員から一定の評価を得ることができた。ただ、候補者が訴える政策の実現性の検証や、当選者の選挙後の取り組みをしっかりと報じることなど多くの注文もいただいた。今後の選挙報道に生かし、新聞の責任を果たしていく。(選挙取材プロジェクトチーム)

■サクラエビ異変 駿河湾産サクラエビの記録的不漁が取材の始まりだった。背景に何が。漁の在り方だけではなく、取材を進めると駿河湾から離れた川の上流部の異変が影響しているのでは、との思いに至った。取材班で議論を重ねた。資源回復と保護は不可欠だ。数々の禁漁など思い切った漁獲規制を訴えていく。さらに、頭等とな

っている河川の濁りの改善と、その発生源とみられる上流部のダムの撤去も主張に据えることにした。濁りがサクラエビの組成にどう影響し、不漁につながっているのか。今後の取材の焦点と考えている。ここを解明し、環境問題や限りある水産資源の在り方を問いたい。(「サクラエビ異変」取材班)